平成27（2015）年
8月1日
第171号 毎月発行
編集　公民館だより編集室
発行　西東京市公民館
毎月第４月曜日は休館日です

西東京市 公民館だより

今月号の内容

3面…「第７回保谷駅前公民館ジョイントコンサート」へどうぞ
4面…新コーナー「公運審はいま」が始まります

柳沢公民館　柳沢1-15-1　☎042・464・8211　kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館　南町5-6-11　☎042・461・1170　tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館　芝久保町5-4-48　☎042・461・9825　shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp
谷戸公民館　谷戸町1-17-2　☎042・421・3855　yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館　ひばりが丘2-3-4　☎042・424・3011　hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館　東町3-14-30　☎042・421・1125　ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

少女時代、戦時下の中国で

谷戸町在住の田宮佼子さんに、戦争体験をお聞きしました。
※田宮さんは昭和4年、暹羅（現タイ）国バンコクの日本公使館で生まれました。外交官の父親の転勤に伴い、少女時代の大半を中国各地で過ごし、天津で終戦を迎えました。

戦後70年を経て

田宮さんは、こう言いました。

「今の若い人たちの中には、戦争をゲームのようにとらえていて、かっこいいと思っている人もいますよね。戦争の恐ろしさや悲惨さがわからないのでしょう。国が戦争を始めたら、真っ先に戦地に送り出されるのは若者なのに。今、近隣の国々との間に戦争の火種があるように思えてなりません。戦争は本当に恐ろしいです。二度と戦争を起こすことがないよう、私が体験したことを事実として、若い人に伝えていければと思います」

戦後70年。戦争体験の継承はますます難しくなってきています。

「戦争を知らない世代へ」という田宮さんの思いとともに、お話の一部をお伝えします。

河北陸軍病院にて友人と撮影（右が田宮佼子さん）

トラックに乗って慰問に

自らの戦争体験を語った後に、小学校5・6年は徐州で過ごしました。5年生の時、戦場へ死を覚悟で向かう小隊を慰問してほしいと日本軍から要請され、駐屯地に慰問に行ったことがあります。夏の夜、5年生40人ほどが2台のトラックの荷台に乗って、真っ暗な広い田舎道を走りました。昼間は明るくて危なかったのでしょう。家もない原野には小山がいくつもあり、そこからボーボーと青く燃える火の玉が見えました。それは、中国人のお墓でした。

田宮佼子さん（85歳）

朝方に駐屯地に着き、一眠りして食事をした後、屋外の急ごしらえの舞台の上で、若い兵隊さん50人くらいを前に、「かぐや姫」の劇や日本の歌を歌いました。その時に、日本から部隊に届いた慰問袋の中に入っていた手作り人形をもらいました。日本に残してきた家族を思い出したのかもしれませんね。（当時、兵士らを慰問するため、日用品や娯楽用品を袋に入れて戦地に送っていました）

なぎなたの訓練で

6年生のなぎなたの訓練では、一生懸命やっているのに、日本から来た女の先生に何度も注意され、つらく当たられる経験をしました。後に父から、先生は私を朝鮮の子だと勘違いしていたからだと聞きました。私たち子どもは、朝鮮も台湾もなく仲良く遊んでいるのに、なぜ先生ともあろう人が差別的な態度をとるのかとひどくショックを受けました。

学徒動員で陸軍病院へ

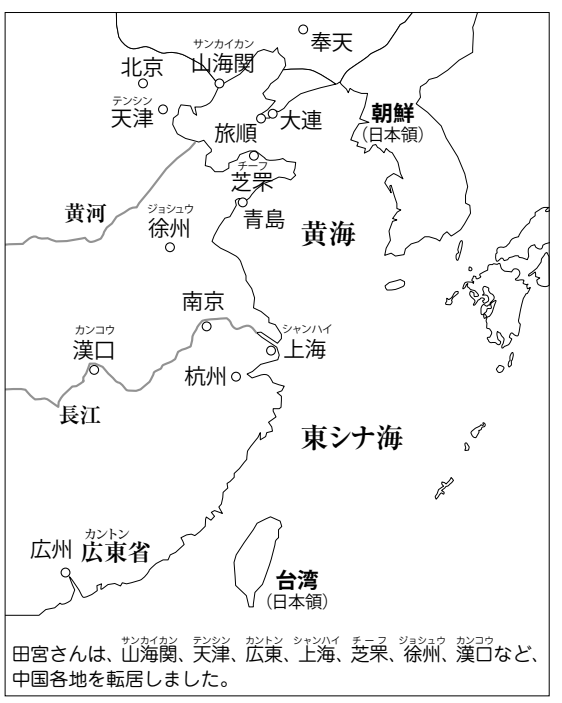
12歳の時、広島の女学校に入学し、2年生の夏に再び中国に赴任することになった両親と一緒に漢口に移るまで、そこで学びました。

昭和19年、天津にいた女学校3年生の時に学徒動員が始まり、時々森永製菓工場に行って兵隊さんの非常食となる乾パンやチョコレートの包装作業をしました。一学年上の4年生は、河北陸軍病院に行かされました。看護婦も衛生兵も足りなくて、女学生を動員したのでしょう。天津にある4つの女学校の4年生がそこに集められ、兵舎の一角に泊まり込んで、一年間看護婦になる教育を受けたんです。卒業後は、専門学校などに進学する人以外は病院に残って、従軍看護婦として働きました。

昭和20年春、4年生になると私も親元を離れ、陸軍病院に動員されました。午前中は医学と看護を学び、午後は負傷兵の看護をしました。最前線の病院だったため、運びこまれるのは死ぬ一歩手前の負傷兵ばかり。麻酔なしで脚を切断する場にも立ち会いました。死臭が漂っていたので、兵隊さんにたかっているハエをうちわで一生懸命払いのけました。でも、戦傷兵の世話をするのは当たり前で、怖いだとか嫌だという感情は不思議とありませんでした。

4年生の私は、医学的なことや看護など、学んだことを生かして女医となるべく日本の女子医学専門学校を大連で受験するつもりでいましたが、8月に終戦になり、その希望は失われました。

広島に投下された原爆で、一年と数か月間、一緒に学んだ同級生の多くを、学徒動員先で亡くしました。私も広島に残っていたら、生きていなかったかもしれません。



田宮さんは、山海関（サンカイカン）、天津（テンシン）、広東（カントン）、上海（シャンハイ）、芝罘（チーフ）、徐州（ジョシュウ）、漢口（カンコウ）など、中国各地を転居しました。
田宮さんが住んでいた当時の東アジア（一部）

わが街をもっと知りたくて

「地域に愛される」演奏目指して！

～都立保谷高校・吹奏楽部～

平成26年度実施の「編集講座」では、「西東京のしごと人」をテーマに、参加者が取材をし、記事にまとめました。今回は、その中のひとつを紹介します。

保谷高校吹奏楽部顧問
岡村繁先生

「保谷高校・吹奏楽部」―。市内の催し物で、毎年素晴らしい演奏を披露している彼ら。その吹奏楽部の指導をされている音楽教諭、岡村繁先生にお話を伺うことができました。

吹奏楽部はコンクール出場のほかに、近隣小学校での演奏・市民まつり・市民文化祭への参加…と、地域にむけての活動が目白押しです。これは地元に愛着を持ち、部員指導に当たっている吹奏楽部OB、OGの方たちの存在が大きいといいます。

現在部員は43名（平成27年1月現在）。ほぼ毎日〝練習〟や〝部の運営〟などに自発的に取り組んでいます。「どんどん進行していくから〝きちんと報告はしなさいね〟と頼むほどです」とやさしくほほ笑む岡村先生の表情に、部員たちとの間にある確かな信頼感がうかがえました。

そんな熱い彼ら「保谷ブラス」（部のニックネーム）の得意とする演奏はポップス系のリズミカルな曲目。楽器パフォーマンスの〝演出〟も交えながら、「自分たちもお客さんと一緒に楽しむ！」がモットー。

また、「宝島」（フュージョンバンド「T-SQUARE」の楽曲）を演奏することが十数年引き継がれているそうで、その辺りも注目してみると面白そうですね。